『雪国』の日英対照研究

―― 感覚性の増減 ――

李　　国　棟
広島大学外国語教育研究センター教授
張　　雲
広島大学大学院文学研究科院生

キーワード：側近視点，三人称主人公視点，「ようだった」，「ように」，「ような」

李国棟は「『雪国』の日英中対照研究――第一段落を中心にして」[1] と題する論文で指摘しているが，川端康成の『雪国』の第一段落には一人称セルフ・ナレーション視点が用いられ，作者自身はこの視点を利用して非常に自然な形で三人称小説の作品世界に入ることができたと同時に，作者のセルフ・ナレーションによって小説全体にも豊かな感覚性が与えられたのであった。しかし，英訳にはこの一人称セルフ・ナレーション視点が取られておらず，その代わりに，標準的な三人称主人公視点が用いられている。こうした結果，英訳は非常に客観的な作品となり，そしてその客観さによって，日本語原作が持つ豊かな感覚性が逆に意識され，これこそが『雪国』の本質だとわれわれは自覚したわけだが，本論では『雪国』の日英対照研究をさらに進め，日本語原作が持つ感覚性およびその増減のメカニズムについて明らかにしたい。

1．「ようだった」「ようであった」と側近視点

『雪国』第一章第一段落の一人称セルフ・ナレーション視点を分析したことによって，川端康成は『雪国』を構築する当初から標準的な三人称主人公視点を用いるつもりがなく，『雪国』の景色と出来事，人物の外見と内面――そのすべてを自分の感覚の中でとらえ，それらを感覚的にコーティングしながら語ろうとしていたことが分かった。しかし，一人称セルフ・ナレーション視点はあくまでも作者が作品世界に入るための導入視点にすぎず，第二段落に三人称主人公島村が登場すると，作者はただちに，

> 汽車のなかもさほど明るくはなし、普通の鏡のように強くはなかった。反射がなかった。だから、島村は見入っているうちに、鏡のあることをだんだん忘れてしまって、夕景色の流れのなかに娘が浮かんでいるように思われて来た。[2]

というように，汽車の中で浮遊視点を作って近距離的に車内の情況や島村の感情の変化を語るようになった。そして，第二章で島村が雪国に到着し，温泉の番頭と一緒に車で宿屋へ移動するようになると，作者はまた第一章の第一段落で汽車に乗って雪国に入ったのと同じように，島村と一緒に番頭の車に乗り込み，島村の側から雪国の風景を語りはじめた。

> 「これが氷点以下かね。」と、島村は軒端の可愛い氷柱を眺めながら、宿の番頭と自動車に乗った。雪の色が家々の低い屋根を一層低く見せて、村はしいんと底に沈んでいるようだった。

この引用の末尾の「ようだった」は『雪国』に用いられた最初の「ようだった」であり，作者が島村の側に身を置くようになったという新しい側近視点の誕生を示している。第一章には「ようだった」あるいは「ようであった」が一度も用いられていないが，第二章冒頭のこの「ようだった」以後，「ようだった」あるいは「ようであった」はすべての章に用いられるようになり，これによって，島村の側から語るという側近視点は『雪国』を支える本格的な視点であるということが明らかになった。

『雪国』を調べてみると，「ようだった」「ようであった」およびその中頓形の「ようで」の用例が合わせて41例あり，すべて島村の側にいる作者の観察とかかわっている。そして英訳と対照してみると，この41例の中の14例が英訳では改変して翻訳されているか，あるいは全く翻訳されていない。日本語の「ようだ」は助動詞であり，「不確かな判断」と「比喩・比況」と「例示」がその主な意味である。この三つの意味から見ると，改変翻訳と省略の14例はいずれも「不確かな判断」に用いられたものである。改変翻訳の６例では，島村が葉子や駒子および酔った自分自身を観察しているのに対して，省略の８例の中では，島村が主題となっているのは６例，作者が島村の側にいて，島村と一緒に車窓から雪国の風景を眺めているのは１例，そして残りの１例では，島村が駒子のナワバリに立ち入らないで駒子の内心を推察しているのである。

> 古い燃えかすの火に向かって、ポンプが一台斜めに弓形の水を立てていたが、その前にふっと女の体が浮かんだ。そういう落ち方だった。女の体は空中で水平だった。島村はどきっとしたけれども、とっさに危険も恐怖も感じなかった。非現実的な世界の幻影のようだった。(後略)

これは第九章の一段落であり，改変翻訳の一例である。その英訳を確認してみよう。

> A line of water from one of the pumps arched down on the smoldering fire, and a woman's body suddenly floated up before it: such had been the fall. The body was quite horizontal as it passed through the air. Shimamura started back — not from fear, however. He saw the figure as a phantasm from an unreal world. [3)]

日本語原作の末尾の「ようだった」は「He saw」と英訳されている。葉子が繭倉の二階から飛び降りた様子を見たとき，作者は島村の側で島村とともに「ようだった」という不確かな判断を下した。しかし英訳はこれを認めず，この判断を下した判断者が誰であるかをより明確にするために作者を島村の側から排除した。もちろん，作者が作品世界の外から客観的に語るという三人称主人公視点を取っている英訳では，これは当然な措置だといえよう。しかしこの例からも分かるように，英訳が取っている標準的な三人称主人公視点ではより明確に表示しなければならない判断を，日本語原作の側近視点は「ようだった」や「ようであった」でおぼろげに表示しているのである。

> 「この子、気がちがうわ。気がちがうわ。」
> そう言う声が物狂わしい駒子に島村は近づこうとして、葉子を駒子から抱き取ろうとする男たちに押されてよろめいた。踏みこたえて目を上げた途端、さあと音を立てて天の河が島村

のなかへ流れ落ちるようであった。

これは『雪国』の最終段落であり，駒子は飛び降りて死んだ葉子を「自分の犠牲か刑罰かを抱いているように」抱き，人込みの中で気が狂わんばかりに「この子、気がちがうわ。気がちがうわ」と叫んでいた。島村は人々を分けて駒子に近づこうとしたが，押された勢いで不意に夜空を見た途端，「さあと音を立てて天の河が島村のなかへ流れ落ちるようであった」。

"Keep back. Keep back, please" He heard Komako's cry. "This girl is insane. She's insane."

He tried to move toward that half-mad voice, but he was pushed aside by the men who had come up to take YoKo from her. As he caught his footing, his head fell back, and the Milky Way flowed down inside him with a roar.

以上の英訳を読むと，末尾の「ようであった」がまったく翻訳されていないことが明らかになる。一方，中国語訳を確認してみると，この「ようであった」ははっきりと「好像」[4] と翻訳されているのである。

島村も頬が火照るようで、さっさと通り過ぎると、直ぐに駒子が追っかけて来た。

Shimamura's cheeks too were aflame. He walked briskly by, and immediately Komako came after him.

第四章からの引用であり，この引用の中の「ようで」も英訳で省略されている。考えてみると，英訳では三人称主人公視点が取られ，作者と三人称主人公島村との関係が非常に直接的になった以上，作者と島村の間には「ようだった」や「ようで」のような間接的で不確かな判断が当然成立しなくなる。「the Milky Way flowed down inside him with a roar」と英訳の作者が言ったら，すべてがそう決まってしまい，英訳の作者は自分自身の判断に対して不確かな「ようであった」を使う必要が全くないわけである。

しかし，日本語原作は事情が異なっている。これまで，改変翻訳と省略の例として第九章から２例，第三章から１例をそれぞれ取りあげたが，実は改変翻訳や省略の全14例の中の12例は第八章と第九章に集中しており，第八章には５例，第九章には７例があった。ストーリーの進展，とりわけ島村が駒子との別離を意識してくるにつれて，作者はより多く島村の側から島村を語らなければならなくなったが，しかし，彼が作品世界の中にいるからこそ，逆に外在的な視点を取っている英訳のように，直接島村について語ることができない。筆者の考えでは，「ようだった」や「ようであった」の多用はすなわち作者のこの特殊な位置によるものなのである。

もちろん，「ようだった」や「ようであった」の多用もそれ相応の効果がある。日本語としては，「ようだった」や「ようであった」は明かにに感覚表現であり，日本の有名な言語学者工藤真由美氏が「『ようだ』『らしい』とテンス」[5] と題する論文で指摘しているように，「ようだ」の過去形は「対象的側面における〈様子の存在〉を〈話し手の知的印象〉として一体的に記述・描写」する役割を果たしており，それらが多用されると，作品全体の感覚性が自然に増してくる。改変翻訳や省略で14の「ようだった」と「ようであった」を英訳は減らしているが，これを裏返せば，

本来標準的な三人称主人公視点を持つ小説では用いる必要がない「ようだった」と「ようであった」を日本語原作は側近視点を活用して意識的に用いており，その分，感覚性が英訳より多く表現されている。そして，この14例は全41例の中の14例なので，側近視点を本格的視点とした『雪国』は英訳のような普通の三人称主人公視点を持つ小説より34.1％の感覚性を増やしたということになる。日本語原作のオリジナリティーがここに再確認されたわけである。

2．視点の高低

島村は二度目の雪国滞在を終えて，東京へ帰る汽車に乗り込んだ。

> 汽車が動くと直ぐ待合室のガラスが光って、駒子の顔はその光のなかにぽっと燃え浮ぶかと見る間に消えてしまったが、それはあの朝雪の鏡の時と同じに真赤な頬であった。またしても島村にとっては、現実というものとの別れ際の色であった。
>
> 国境の山を北から登って、長いトンネルを通り抜けてみると、冬の午後の薄光りはその地中の闇へ吸い取られてしまったかのように、また古ぼけた汽車は明るい殻をトンネルに脱ぎ落として来たかのように、もう峰と峰との重なりの間から暮色の立ちはじめる山峡を下って行くのだった。こちら側にはまだ雪がなかった。
>
> 流れに沿うてやがて広野に出ると、頂上は面白く切り刻んだようで、そこからゆるやかに美しい斜線が遠い裾まで伸びている山の端に月が色づいた。（中略）山の裾野が遮るものもなく左右に広々と延びて、河岸へ届こうとするところに、水力電気らしい建物が真白に立っていた。それは冬枯の車窓に暮れ残るものであった。

第六章の三段落であるが，第一段落では，島村が語り手となって車窓の外の駒子を語っている。しかし，ラスト・センテンスの「またしても島村にとっては」をよく吟味すると，これは島村の発話とも作者の発話とも考えられる言い方であり，この言い方によって，島村の側にいる作者はいよいよ直接発話をするぞといったような予感がするのである。

そのセンテンスを受けたのが第二段落であり，この段落の語り手は完全に作者に変わり，「こちら側にはまだ雪がなかった」というラスト・センテンスは，すなわち島村とともに長いトンネルを通り抜けた作者が自分の目で確認した状況である。もちろん，島村もこの状況を確認したにちがいない。しかし，発話者は島村ではなく，作者なのである。

第三段落に入ると，作者の側近視点のマーカーである「ようで」がついに現れた。しかし，標準的な三人称主人公視点を取っている英訳はまたこの「ようで」をあっさりと省略しているのである。

> Following a stream, the train came out on the plain. A mountain, cut at the top in curious notches and spires, Fell off in a graceful sweep to the far skirts. Over it the moon was rising. ……Nothing broke the lines of the wide skirts to the right and left. Where the mountain swept down to meet the river, a stark white building, a hydroelectric plant perhaps, stood out sharply from the withered scene the train window framed, one last spot saved from the night.

英訳では第三段落の主語が「the train」となっている。しかし日本語原作には，汽車の中にいる作者の視線が強く感じられ，作者は島村と一緒に車窓から外の風景を眺めていたと解される。山峡を下ってきた汽車の車窓から山頂を眺めるのは，低い所から高い所を見ることであるので，高い所の様子が当然正確に把握できず，「ようで」が用いられている必然性がここにあるわけたが，この点からも分かるように，「ようで」を用いる視点は低く，水平的または仰視的な観察はできるが，俯瞰的な観察はできない。しかし英訳にとっては，この「ようで」が不要である。作者がそもそも作品世界の外にいるので，島村と一緒に汽車の車窓から山頂を眺めることはありえないし，作品世界に対して作者の語りはすべて直接的なので，間接的な描写も必要ではない。作品世界の外にいるということは事実神のように作品世界に君臨することを意味する。したがって，山頂の様子も当然のことながら作者の眼下にあり，「ようで」のような不確かな判断をする必然性がまったくなかった。要するに，英訳の三人称主人公視点は作品世界のすべてを俯瞰できる絶対的な高さを有しているのである。

> 島村が汽車から降りて真先に目についたのは、この山の白い花だった。急傾斜の山腹の頂上近く、一面に咲き乱れて銀色に光っている、それは山に降りそそぐ秋の日光そのもののようで、ああと彼は感情を染められたのだった。

第七章の一段落である。一見，第六章のその段落と同じく「ようで」が用いられた風景描写のように見えるが，事実，第七章のこの「ようで」は第六章のその「ようで」と異なり，単に普通の「比喩」に用いられている。

> The first thing that had struck Shimamura's eye as he got off the train was that array of silver-white. High up the mountain, the *Kaya* spread out silver in the sun, like the autumn sunlight itself pouring over the face of the mountain. Ah, I am here, something in Shimamura called out as he looked up at it.

「比喩」に用いられたこの「ようで」は英訳でも省略されず，「like」と翻訳されている。日本語原作を読むだけでは，「秋の日光そのもののようで」の「ようで」と「頂上は面白く切り刻んだようで」の「ようで」がそれぞれ異なる視点を示しているようには感じられないが，英訳と対照してみると，「頂上は面白く切り刻んだようで」の「ようで」が側近視点特有の側近性と低さを示していることが明らかになる。

もちろん，この「ようで」は視点的な意義を持っているだけでなく，感覚的な表現でもあるから，感覚性を増やす点では前述の「比喩」に用いられた「ようで」とほとんど異なってはいない。要するに，「ようだった」「ようであった」およびその中頓形の「ようで」は側近視点のマーカーであると同時に，また豊かな感覚性を醸し出しているのである。

3．感覚性と「seem」

前の２節では，「ようだった」「ようであった」をキーワードとして視点の変化と感覚性の増減について考察してきた。しかし実は，『雪国』には「ように」「かのように」がまた116例用いられており，これらも『雪国』の感覚性の増減と密接にかかわっているのである。

英訳と対照してみると，この116例の「ように」「かのように」は５つのタイプに英訳されている。すなわち，①「seem」，②「as if / as though」，③「as / like」，④「改変翻訳」，⑤「省略」であるが，各タイプの数を数えると，「seem」は16例，「as if / as though」は23例，「as / like」は31例，「改変翻訳」は15例，「省略」は30例となっている。本節では，まず「seem」について分析してみよう。

だから、島村は見入っているうちに、鏡のあることをだんだん忘れてしまって、夕景色の流れの中に娘が浮かんでいるように思われて来た。

Since there was no glary, Shimamura came to forget that it was a mirror he was looking at. The girl's face seemed to be out in the flow of the evening mountains.

本論の第１節で一度引用した第一章の一段落であり，島村がその主語となっている。作者はこの時島村の近くにいて，島村の感情的変化を語っており，末尾の「ように思われて来た」がその現れである。これは自発的な感覚表現であると同時にまた一種の判断であるが，英訳ではこの表現が変えられた。英訳の主語は「the girl」となり，作者は作品世界の外から「the girl」を三人称主語にして目の前の現象を「seemed」で語っている。すなわち，不確かでありながらも，英訳の作者は外観による判断を下しているのであった。

窓の鏡に写る娘の輪郭のまわりを絶えず夕景色が動いているので、娘の顔も透明のように感じられた。

Cut off by the face, the evening landscape moved steadily by around its outlines. The face too seemed transparent.

第一章からもう一例引用したが，この例でも作者が島村の側で語っているので，「感じられた」は島村の自発的感情表現となっている。しかし，英訳は「seemed＋形容詞」，すなわち「見せかける，～ふりをする」の意味で日本語の「ように感じられた」を翻訳しているのである。

以上の二例から見ると，「ように＋感じられる・思われる」が基本的に主人公の自発の感情と判断の両方を表しているのに対して，「seem」は外観による判断を表している。「自発」には感情的変化の要素が含まれているが，しかし「seem」にはそれが全くない。したがって，「ように＋感じられる・思われる」が「seem」に翻訳されたことによって，日本語原作の感覚性が半分ほど減らされたと理解してよいだろう。

中村保男氏の『新編英和翻訳表現辞典』[6] によると，英語の seem 文は「外見上は，あるいは見たところは～であるけれども，実際はどうなるか，はっきりしない」という意味合いを正面に押し出す表現法であり，外観による判断を含め，主として話し手の主観に基づき，間接的に推測・判断する場合に用いられるという。「seem」が独立した一語で，意味も画然と際立っているが，日本語の「ようだ」およびその活用形は文中に溶け込んでいる「語ならぬ語」であるので，「見かけ」と「真実」との区別が英語ほど画然としていない。すなわち，見かけと真実が混じっている日本語の「ようだ」およびその活用形は感覚性が豊かであるわけだが，この角度から以上の二例を見ると，島村が目にしているのはまさに見かけか真実かはっきりと分けられないシーンであり，島村自身の感覚が文中の隅々にまで溶け込んでいたことを理解することができるのである。

4.「as if / as though」と「like / as」の感覚性

本節では「比喩」と「比況」に用いられた「ように」について分析するが，それらが「as if / as though」と「like / as」の二タイプに英訳されているので，英訳のこの分け方に従って逐一考察してみよう。

①「as though」と「as if」

「as though 」と「as if」――この二つの英語表現は意味も用法もほとんど同じで，日本語の「あたかも（ちょうど，まるで）…のように」に相当する。普通，事実に反する状態を意味する節を導き，単に様態を表す場合に用いられる。

向側の座席から娘が立って来て、島村の前のガラス窓を落とした。雪の冷気が流れ込んだ。娘は窓いっぱいに乗り出した。遠くへ叫ぶように「駅長さあん、駅長さあん。」

Leaning far out the window, the girl called to the station master as though he were a great distance away.

これは『雪国』第一章の冒頭に用いられた最初の「ように」である。「動詞＋ように」の形で娘の動作の様態を表し，「比況」だと考えられる。「比況」とは動作や状態をほかのものにたとえて表すことであり，「as if 」「as though」と英訳された23の例文をまとめてみると，すべての例文は「動詞＋ように」の形であることがわかった。すなわち，「ように」の前には必ず動詞が存在し，動作や状態を表している。この例では，日本語原作も英訳も主語が娘であり，そして，同じように外側から娘が語られているので，日本語原作と英訳の感覚性はほぼ同じだと考えられる。

でも直ぐに泣き止むと、自分をあてがうように柔らかくして、人なつっこくこまごまと身の上などを話し出した。酔いの苦しさは忘れたように抜けたらしかった。

But a moment later she was calm again. Soft and yielding as if she were offering herself up, she was suddenly very intimate, and she began telling him all about herself. She seemed quite to have forgotten the headache.

第三章のこの例で，島村は酔っている駒子の様子を語っている。日本語原作には二つの「ように」が同じように用いられているが，英訳ではそれらが異なっている。後半の「ように」が外観による推定であるのに対して，前半の「ように」は状況の比喩，島村の感覚である。泣き止んだ駒子が何ごともなかったかのように別の話をしている様子を見て，島村は彼女がさきの酔いの苦しさを忘れたためだろうと推測した。駒子の「話す」という行為は実際に起こった。しかし，「自分をあてがう」という行為は起こったかどうかが分からない。柔らかく人懐こいと感じているのは島村個人の感覚にすぎず，客観的な事実としては確定しがたい。したがって，英語ではそれらが区別され，比況は「as if」，推定は「seemed」と翻訳されているのである。

第六章からもう一例引用してみよう。

しかし目の前の蜻蛉の群は、なにか追いつめられたもののように見える。暮れるに先立って黒ずむ杉林の色にその姿を消されまいとあせっているもののように見える。

But the dragonflies here before him seemed to be driven by something. It was as though they wanted desperately to avoid being pulled in with the cedar grove as it darkened before the sunset.

この例には二つの「のように見える」が用いられているが，「外観による推定」と「比況」の違いがあるため，英訳では区別されている。前半は飛んでいる蜻蛉の様子からの推定だと考えられるので，「seemed to be」が用いられた。しかし後半では，島村は蜻蛉が飛んでいる様子を他のことに譬えた上でそれが自分に与えた感覚を語っているので，「as though」と翻訳されたわけである。

②「like / as」

「like / as」と英訳された「ように」と「かのように」は31例ある。そして，この31例の日本語構文はほとんど「名詞＋のように」である。

その下に小さくつぼんだ唇はまことに美しい蛭の輪のように伸び縮みがなめらかで、黙っている時も動いているかのような感じだから、（後略）

but the bud of her lips opened and closed smoothly, like a beautiful little circle of leeches.

第三章からの引用である。ここでは，駒子の唇が蛭の輪にたとえられている。もう一例見てみよう。

火はもえさかって来るばかりだが、高みから大きい星空の下に見下すと、おもちゃの火事のように静かだった。

The fire blazed higher. From the mountain, however, it was as quiet under the starry sky as a little make-believe fire.

第九章のこの引用では，島村と駒子は突然の擦半鐘の音に驚き，火事のことに気づいたが，その遠い所の火事の音が聞こえないので，「おもちゃ」のように島村は感じていた。本当の火事が「おもちゃ」にたとえられているのである。

以上の二例からも分かるように，ある物事と類似したものを借りて説明する時の「ように」は「as / like」と英訳されている。31例中の13例が駒子と葉子の動作や容貌の喩えに用いられており，そのほかに，景物描写に用いられた「ように」はまた13例ある。そして，それらの英訳はほとんど「as / like＋名詞」となっており，日本語原作と同じように比喩をもって感覚性を表現しているのである。ちなみに中国語訳も同じで，以上の二つの例文はいずれも「宛如」と翻訳されているのである。

5．感覚性の削除——「改変翻訳」と「省略」

「ように」と「かのように」を改変し，あるいはそれらを省略した英訳の例はまた45例あり，116例の38％を占めている。

①改変翻訳と時間差

改変翻訳とは，日本語原作の感覚的表現を英語らしい言い方に変えることである。改変翻訳の15例をまとめてみると，主に三つの英語表現が当てられている。「almost」と「make him think (feel) that」と「might (could) have been」であるが，いずれも三人称の客観的な語り方である。具体的な例を見てみよう。

閉じ合わした濃い睫毛がまた、黒い目を半ば開いているように見えた。
The rich eyelashes again made him think that her eyes were half open.

これは第四章からの引用であり，側近視点から島村の感覚が語られている。また，作者は島村とともに駒子を見ているので，見ながら語られているということも分かる。一方，英訳は作品世界の外にいる作者の客観的な語りであり，そして，作者が主人公の睫毛と目を確認した後に語りを始めたので，日本語原作との時間差が自然に浮き彫りになった。

深い雪の上に晒した白麻に朝日が照って、雪か布かが紅に染まるありさまを考えるだけでも、夏のよごれが取れそうだし、わが身をさらされるように気持ちよかった。もっとも東京の古着屋が扱ってくれるので、昔通りの晒し方が今に伝わっているのかどうか、島村は知らない。
The thought of the white linen, spread out on the deep snow, the cloth and the snow glowing scarlet in the rising sun, was enough to make him feel that the dirt of the summer had been washed away, even that he himself had been bleached clean.

第九章の引用である。この引用の日本語原作も側近視点による語りなので，「雪か布かが紅に染まるありさま」を考えながら語っているということが明らかである。すなわち，五感による感覚がこの二例の共通点であり，身をもって経験したことを語る時，感覚性が大分増してくることは自然な成り行きであろう。しかし，この二例の英訳を見ると，「made him think / make him feel」が用いられており，作者は作品世界の外に立ち，三人称主人公視点で語っていることがわかる。このような直接的な語り方は当然のことながら感覚的な味わいを考慮しないのである。

要するに，英訳はいつも事後に語るという語り方を取っている。英訳の作者は見ながら或いは感じながら語るというのではなく，島村のある動作が済んだ後，その効果を語るのである。そうすると，英訳と日本語原作の間には語りの時間差が生じ，等質の描写が出来なくなるのである。

英訳と日本語原作の語りの時間差について，もう一例確認してみよう。

「それは悪かったね。」と、島村は約束を守らなかったのを詫びるように、また師匠の死を悔むように言うと、(後略)
"I'm sorry." Shimamura's words could have been either an expression of sympathy or an apology for the broken promise.

第七章のこの例では，作者は島村の側にいて，島村の言葉を聞き，その身振りを見ながら語っている。しかし，英訳は「could have been」という過去完了形でそれを処理したので，島村の

言葉の客観的な効果が語りのポイントに変わった。要するに，この時間差によって日本語原作の側近視点と英訳の三人称主人公視点のもう一つの違いが浮き彫りになった。すなわち，側近視点が同時性を有しているのに対して，三人称主人公視点は事後性を有しているということである。

②省　略

省略とは「ように」と「かのように」を翻訳しないことであり，英訳では翻訳されなかった「ように」と「かのように」は30例にも達している。そして，この30例を中国語訳で確認してみると，中国語訳も半分の15例を省略している。英語と中国語の感覚では用いる必要がない「ように」と「かのように」を日本語原作は意図的に用いているというわけである。

しかし本当に透明かどうかは、顔の裏を流れてやまぬ夕景色が顔の表を通るかのように錯覚されて、見極める時がつかめないのだった。

But was it really transparent? Shimamura had the illusion that the evening landscape was actually passing over the face, and the flow did not stop to let him be sure it was not.

第一章のこの例には「かのように」と「錯覚」という二つの不確定な表現が重ねて用いられている。しかし英訳にとっては，錯覚や幻覚を表す「illusion」があれば，ほかの不確定な表現は不要となる。英訳は三人称主人公視点を用い，しかも結果を語っているので，他人のこととすでに発生したことに対して不確定な表現をする必要が当然ないのである。しかし，側近視点が取られている日本語原作では，作者は自分自身の感覚を語っているように登場人物を語りたいのであれば，「かのように」が必要になる。側近視点は作品世界内に設定されているので，同時性を有しているわけだが，また同じ理由から，間接性も有している。「かのように」はまさに同時性と間接性に要請されて用いられた表現だといえよう。

日本語原作では，動作の様態を表す時にも「ように」が用いられている。

「(前略) 私酔ってる？」と、倒れるように鏡台の両端をつかまえて覗きこむと、しゃんと裾を捌いて出て行った。

She peered into the mirror, bracing both hands against the stand.

枯れ切った音のする戸の裾を抱き上げるように引いて、駒子は囁いた。

The door sounded old and dry as she lifted it from the groove and pushed it back.

以上の二例は第八章からの引用であり，いずれも駒子に対する描写である。日本語原作と英訳を比較してみると，英訳がこれらの内容を客観的事実として説明しているのに対して，日本語原作は「V ＋ように＋ V」という構文で動作の様態を表しており，駒子が目の前で動いているように感じられる。日本語原作特有の感覚性の一部はまさに「V ＋ように＋ V」のような表現によって支えられているのである。

ちなみに，この二例の中国語訳に当たってみると，いずれも英訳と同じ処理で，日本語原作の感覚性が消されてしまったのであった。

以上，「ように」と「かのように」の英訳「seem」，「as if / as though」，「as / like」，「改変翻

訳」および「省略」と感覚性表現との関連について分析してきたが，まとめてみると，第一に，「seem」は「ように感じられる・ように思われる」における「自発」という感覚的な要素を省略したけれども，不確かな判断の意味を保留しているので，日本語原作の50％の感覚性がなお残っているのではないかと考えられる。第二に,「as if / as though」と「as / like」は「比喩」と「比況」に用いられたので,原作とほぼ同様な感覚性を伝達していると結論づけられよう。第三に,「改変翻訳」と「省略」は日本語原作の感覚性を完全にカットしているので，その部分の感覚性が完全に消えてしまったと考えられる。「改変翻訳」と「省略」が合わせて45例あり，全116例の33.8％を占めている。したがって，日本語原作の「ように」と「かのように」に限って言えば，33.8％の感覚性が完全にカットされたということになるが，全116例の13.8％を占めている16例の「seem」も日本語原作の50％の感覚性をカットしているので,「ように」と「かのように」の英訳だけでも，日本語原作の感覚性が40.7％失われているということになる。さらに,「ようだった」「ようであった」の英訳も34.1％の感覚性をカットしているので，両方を合計すると，英訳は日本語原作の37.4％の感覚性をカットしているということが判明した。実は，日本語原作の地の文にはまた57例の「ような」が用いられており，英訳はその中の19例を省略し，７例を改変して翻訳している。すなわち,「ような」の英訳によって日本語原作の感覚性がまた45.6％失われてしまい,「ようだった」「ように」「ような」の三者が失った感覚性の平均値をもとめると，40.1％にも達しているのである。表現上，四割以上の削除があると，その英訳はまだ「翻訳」であるといえるかどうか，自然に疑われるであろう。しかしこれまで考察してきたように，この問題はそもそも翻訳の問題ではなく，日本語原作固有の，三人称主人公視点と一人称感覚の結合という特殊性によるものである。三人称主人公視点と一人称感覚の結合によって「ようだった」「ように」「ような」が多用され，そしてこれら感覚表現の多用によって，日本語原作の『雪国』は一般的な三人称主人公視点を持つ小説より，少なくとも40.1％多くの感覚性を表現することができた。われわれはついに「新感覚派」の代表作である『雪国』がいかに豊かな感覚性を表現しているかの一端をパーセンテージとしてデータ化することができ，日本語原作と英訳の対照研究の意義を改めて確認できた次第である。

注

1）『広島大学大学院文学研究科論集』第65巻所収。2005年12月。
2）本論が引用した『雪国』の日本語原作は，岩波文庫2003年３月改版である。
3）本論が引用した『雪国』の英訳は,《SNOW COUNTRY》(TRANSLATED BY EDWARD G. SEIDENSTICKER, FIRST VINTAGE INTERNATIONAL EDITION, FEBRUARY 1996) である。
4）本論が参考にした『雪国』の中国語訳は，葉渭渠訳『雪国』（人民文学出版社，2002年１月）である。
5）『日語研究』第３輯所収。商務印書館，2005年12月。
6）中村保男著『新編英和翻訳表現辞典』研究社，2002年８月。

Abstract

A Comparative Study on SNOW COUNTRY and its English Edition
—— Variable Use of Imagery ——

Guodong LI
Professor in Institute for Foreign Language Research and Education
Hiroshima University
Yun ZHANG
Graduate student in Graduate School of Letters
Hiroshima University

This paper analyzes the sensuous expressions of SNOW COUNTRY written by Yasunari Kawabata.

There are many "ようだった" "ようであった" "ように" "ような" expressions in SNOW COUNTRY. This is an important feature which is controlling the Aide-Viewpoint (側近視点) and increasing the sensuality of the work. But the English Edition, which is translated from the Viewpoint of a third Person-Protagonist, has changed or cut 40.1% of them. Of course, these facts show an essential difference between SNOW COUNTRY and its English Edition, but at same time we can also interpret them in the following way: the sensuality of SNOW COUNTRY written in Japanese has 40.1% more than its English edition in the sphere of "ようだった" "ようであった" "ように" "ような". Here, we can find the distinctive feature of Yasunari Kawabata's work and gain an appreciation of Japanese literature.